



審査員特別賞  
那須正幹賞

小さな命の物語

吉田 ゆう

七月になってすぐのことです。

「わあ、何これ。動いてるやん。」

私は、思わず顔を近づけてみます。とう明のプラスチックのお弁当パックの中では、ちぎられた葉の上で、消ゴムのカスほどのいも虫が、長くなったり短くなったりウネウネとはっています。テカテカと玄米色に光るその虫は、首をふりながら葉をなめるように食べていきます。

「このまえさ、富岡製糸場の話をママに聞いてたでしょ？ゆうも生糸をつむいでみたいかなあと考えた

の。」

母は、なんだかうれしそうに手の平ほどの大きなくわの葉を、小さく小さく指先でちぎりながら言います。

「去年ゆっちゃんか、飼育したカイコの卵がちょうぶ、化かしたんだって。もらってきたのよ。」

「糸を取るのにこんなに数がいるの？」

私はびっくりしました。絹の糸をはく虫です。もっと、一匹ずつ大切に育てるのかと思っていたのです。

「やだ、きもい無理かも。」

私は首のつけ根がゾクゾクツツとして、背中がかゆくなりました。

短い消ゴムのカスのような虫のかたまりは、くわの葉のくずをきれいに平らげていきます。後に残るのは、ふりかけの粉のようなフンだけです。もりもり食べるカイコたちは、二日もするとパンパンに大きくなりました。

「あれっ、いつもと違うフンがあるよ!!。」私はあわてて母に報告します。

「あっ、それきつと脱皮したんじゃないの。虫の色変わっているんじゃない?。」

よく見ると、玄米色の虫の中に一匹だけチョークのよう  
な白い虫がいました。

「そっか、脱皮したんだ。えらかったね。」

私は小声で話しかけていました。そして、指でそつと頭  
をなでたりもしました。一匹が脱皮した後、次から次に  
脱皮競争が始まりました。きゅうくつなズボンをおろす  
みたいに、頭からおしりのほうに皮をおろしていきま  
す。みんな白いチョーク色で鼻の黒いたれ目顔に変わっ  
ていきます。食べる量もぐんぐん増えたので、与えるく  
わの葉もカイコの体の二倍くらいの大さきにしてあげま  
す。体のシワがのびて、パンパンに大きくなると、こお  
りオニをしているみたいにしばらく動かなくなります。

「眠」です。くわの葉も食べずにじつとして、脱皮の準  
備をするのです。「眠」の後、脱皮。そして、ぐうーん  
と大きくなります。

夏休みに入る前のことです。

三回目の脱皮をしたカイコは、大きなくわの葉を一枚  
ぺロりと平らげます。まるで、私が魚の骨を残すみたい

にくわの葉の葉脈だけをきれいに残して平らげます。体  
をしっかりとるばすと、七センチメートルをこえる子もい  
ます。皮フの表面は、冷んやりしつとりとしていてスベ  
スベです。吸いつくような足は、私の指の形を確かめる  
ように手の上を歩きます。鼻黒のたれ目で優しい顔が、  
ゆっくりとハの字を書くように動き始めました。

「そろそろかな。そろそろだよね。」

母は少し自信なさそうに、紙コップの中に首をふるカイ  
コを入れ始めました。

「何がそろそろなの？」

私は母にたずねます。

「お母さんもわかんないんだけど、ゆっちゃんのパパが  
教えてくれたんだよね。」

「カイコちゃんが首をハの字にふり出したらまゆを作り  
出すから『まぶし』に入れてって言ったの。」

『まぶし』というのは、カイコがまゆを作るための部屋  
のことだそうです。うちでは紙コップを使うことしま  
した。入れてもすぐに逃げだすカイコは、口からペトペ

トする綿毛のような糸を出しています。綿がしを作るときにふわふわと出てきた白い糸によく似ていました。でも、おとなしくコップの中に納まってはくれません。さあ、カイコと私の根くらべ。出るカイコ、入れる私。コップの前で何回くり返したか分かりません。夜にコップに入れて眠った私は、朝起きて一番にコップの中をのぞきました。コップのはしからはしまで張りめぐらされた糸の真ん中で、ぼんやりとした円のまゆが浮かんでいます。

「きれいだね。上手だよ。」

私は、思わずまゆに話しかけていました。まだ中がすけて見える出来たてのまゆの中には、体を「し」の字に反らせてたて回りに歩きまわるカイコがいます。コップのすみっこには、茶色の汁とやまぶき色のフンが一つ残されていました。カイコの本で読んだまゆを作り始める合図です。このぎ式をしたカイコがまゆ作りに入るのです。

朝スケスケだったまゆは、お昼を過ぎたころ真っ白に

なり、美しいだ円形がくつきりとなりました。夜には、中が全く見えなくなりました。でも、そつと耳を澄ますとカイコの足音が聞こえます。（まだ頑張ってるんだ。）

だれも見えていないのに、ずっと同じことをくり返すカイコの姿を想像しながら私は眠りました。翌朝、音のしなくなつたまゆコップのそばで、葉っぱにくるまってまゆを作り始めたカイコを見つけました。私は、あわてました。葉っぱはそのうちかかれてしまいます。母と相談して今のうちに葉っぱからコップへと移すことにしました。そつと葉をはがします。思っていたよりずつとしっかり着いています。まゆをこわさないように慎重に移します。コップに引っこしたまゆはカイコの動きと一緒にゆらゆらコロコロ。居心地が悪かったのか、しばらくしてカイコはまゆから出てきてしまいました。新しい足場をかけて、新しいまゆを作ります。ちよつとうすいまゆになってしまったけど無事に出来上がりました。私はほつとしました。

みんな同じ日に生まれたカイコだけど体の大きさも脱

皮のタイミングも少しずつ違っていきます。まゆを作り始めるのももちろん違って当たり前です。でも一匹一匹と根ぐらべをしながら紙コップに入れるのはすごく大変です。そこで、ぎ式のことを思い出したのです。私はカイコのおしりを調べることにしました。やまぶき色のフンがつまっているおしりを選んで紙コップに移していきます。黒いおしりとレモン色のおしりは、意外と簡単に見分けることが出来たのです。

「私の勝ちでしょ!!。」

私は、かなり得意な気持ちでカイコの顔をつつきました。予想通りカイコは素直にまゆ作りを始めてくれました。みんながまゆを作り終わるまでに四日から五日はかかったと思います。同じ日に生まれたカイコなのに何が違ったんだろう。くわの葉を食べる量や体の大きさに違いがあったのは目で見て分かりました。(毎日の少しずつの差が積もった結果だったのかな?) いくつか調べてみようと思います。

夏休みに入った日曜日のことです。

「つむいでみようか?。」

母が提案しました。

「どうなるか分かんないけど。羽化しないうちに:。」

「えっ、つむいだらカイコはどうなるの。」

私は心配になりました。

「お湯でにてやわらかくしてつむぐから、死んじやうんじやない?。」

私は、予想通りの答えにがっかりしました。

「じゃあ、今までにつむがれたまゆのカイコはみんな死んじやったんだよね。」

カイコの吸いつくような足の間を思い出して悲しくなりました。

「あたりまえじゃん。まゆになった時点でこの子たちの役目は終わりがちも。」

母は残こく言葉で平気で言います。

「絹の糸のために、改良されてつくられた虫よ!。」

「飛ばないし、くわの葉食べて大きくなって、まゆを作って、交尾して、たまごを生んで死んでいく。」

「そんな生き物は、世の中にいっぱいいるじゃない。」

母の口にする言葉の意味は、六年生の私にもよくわかります。カメに与えるエサのいりこや私が今朝食べた目玉焼きの卵。元はみんな命なのです。気にしないで生活していたのに、今はとても気になります。私が育てたカイコだからなのかな。

「どうしよう。」

いやがっている私に母は、

「つむいでみようよ。きっと一番みんなの役に立てる時が、今なんじゃない。」

私はしびしび了解しました。

「カイコも自分にできることは精いっぱいやったと思うよ。ゆうもガンバッテ！」

細い細い糸でした。一つのまゆから出る一本の糸は糸とは言えないキラキラ光るせんいです。三本まとまめても細くて、力を入れると切れそうです。十本まとめるとやっとかみの毛くらいの太さになり、十五本まとめると安心です。たくさんの時間がかかりました。お昼から始

めたのに終わった時には、夜の番組が始まっていた。ゆっくりしないと切れてしまいそうで、もったいない気持ちをお大切にしながらつむぎました。キラキラ輝く糸は、カイコが吐いた順番通りに私の手で巻き取られていくのです。けい光灯の光の下にうす茶色のさなぎが出てきました。きれいな絹の糸のかわりにこんなにたくさんのカイコの命があったのだと思ったら胸があつくになりました。

「いっぱい食べてくれて、ありがとう。」

「大きくなってくれて、ありがとう。」

「立派なまゆを作ってくれて、ありがとう。」

「つむいだ糸、大切にするよ。ありがとう。」

たくさんの言葉があふれます。

私が生きていくためにぎせいになっているたくさんの命があることを、私は忘れてはいけなと思うのです。そして、無限に広がる宇宙の中では、私の命もきつと同じ。昔も今も変わらずに、小さな命に支えられてみんな生きています。日本が豊かな日本になるために、つむが

れたたくさんさんの絹を吐く虫カイコ。そのままゆをつむいだ少女たちの小さな小さな手。歴史の中にも、毎日の食卓にも、毎日読む新聞の中にも、数えきれないほどの小さな命の物語があります。決して、心あたたまるものばかりではありません。きつと、悲しくてせつない物語のほうが多いと思います。みんなが毎日忙しくて忘れてしまっているとと思うけど、ときどきでいいから思いを寄せてみて下さい。自分の命を支えてくれている小さな命の物語。